

に、苛責なき私的リンチを加えられた私達初年兵も、一期の検閲を終え、七ヵ月後私は軍の新編成で奉天省に転属になり、そこで二年半軍役に服し、ひたすら前年まであった満期除隊を指折り数え、切望していた。

ある早朝、突然の非常呼集ラッパで整列したら隊長から軍動員の下達があり、人事担当准尉から氏名が呼ばれ、それぞれ右・左に分別された。右側が主力で、左側は初年兵と召集補充兵・病弱兵、それに初年兵と補充兵の教育担当助教だった。私は補充兵の助教で左側に並んだが、隊長の言葉に愕然とした。右側の主力部隊は内地へ移動、左側の残留部隊は牡丹江省の原隊復帰でした。

その晩、主力部隊に入った同年兵の戦友達は、内務班で「これで満期だ」と、喚くように喜び、酒を酌み交わすのを眺め、原隊復帰の私は好きな酒も咽を通らず、わが身の不運を嘆き、毛布をかぶり涙していた。

ところが、この主力部隊の内地移動は偽りで、輸送船は日本本土を素通りし、硫黄島へ上陸、やがて米軍の総攻撃で、軍司令官以下全將兵が玉碎したことを、

沖縄から台湾に移動した軍営地で知らされ絶句する。結び。古兵が口癖みたいに「帝国陸軍の精兵を育成するため」といって、非力な初年兵の私に加えられたピンタの数々が、今だに臉にうかぶことがある。

## 終戦時の関東軍第一三四師団挺進 隊の最後

鳥取原 白髪 昇

終戦時二十二歳であった私も、既に六十歳の半ばを過ぎてしまった。しかしこの間、当時の事を一刻も忘れる事は出来なかつた。肇国以来、かつて無い敗戦の事実、それは言語に絶する苦悩に満ちたものであった。戦争を知らぬ世代が、国民の過半数を占める今日、戦争体験について記すことに、どのような意味があるのか、人それぞれに、異論があるかも知れない。しかし、一小隊長として戦争に参加し、特殊な経験をした一人として、当時の状況を記すと共に、今は亡き戦友の偉

勲を顕彰することが、生還した者の義務であろうと、敢えて筆を執った次第である。

一片の記録も無いけれども、事実そのものを記さねばならない。満州の広野に、華々しい戦果を挙げることも出来ず、終始地味な戦闘行動ではあったが、与えられた任務を遂行するために、精魂を打ち込み、終戦を知らず、戦闘を続行すること三ヶ月、遂に降伏しなければならなかった苦衷は経験者でなければ理解出来ないかも知れない。生きて虜囚となることは忍びなかったが、ポツダム宣言受諾による無条件降伏という冷厳なる事実の前には如何ともなすすべはなかった。

思えば、世界最強の陸軍といわれた関東軍が、昭和十九年以降、主力を南方戦線に転用され、劣勢な軍容の下、第三百三十四師団挺進隊が、どのように行動し、どのように終焉を迎えたか、誠に拙文ながら体験を記した次第である。

私は昭和十九年二月十日、現役兵として岡山工兵第五十四連隊に入営、関東軍要員となり征途についた。六月十日、兵科幹部候補生、後甲種幹部候補生に合格、

二十年一月八日満州斎々哈爾予備士官学校入校、六月十七日卒業となった。牡丹江第五軍司令部へ申告の際中佐参謀より訓示を受け、それぞれ第一線部隊に赴任したが「沖繩戦も終焉を告げ、戦局は重大な局面を迎えている。今ソ連に侵攻されれば一大事である。見習士官はとかく問題を起しやすい。血気にはやることなく冷静に対処せよ」ということで、ことの重大さを深刻に受け止め、決意を固くしたのである。

その後の体験は新編成第三百三十四師団挺進隊への転属から、ソ連侵攻をもって開始された戦闘が、終戦後三ヶ月に亘り苦難に満ちたものであった。また任務遂行の行動の間、放浪避難の居留邦人の惨状との遭遇、遂には無念の降伏、武装解除、収容所、労役、復員と一年三ヶ月の間となるが、この行動記録を体験記とし、執筆することは紙数の関係上許せぬこと故、記憶に残る事項を断片的ながら抜き書きすることとする。

#### 挺進隊

第五軍司令部に於いて、同僚二名と共に、佳木斯独立混成第七十八旅団工兵隊（隊長田村少佐、ノモンハ

ン事件の生き残り）付を命ぜられ、勇躍赴任した。

屯営は入隊当時のものであり、懐かしさで一杯であった。七月一日、新編成第一三四師団（勾玉）挺進隊に転属、第三中隊付を命ぜられ、中隊編成の基幹である現役兵、及び召集兵を一括しての、教育訓練に任ずることとなった。当時関東東軍では、所謂「根こそぎ動員」で、決戦師団を編成中であつた。七月十日編成完結、爾後本格的訓練を実施、戦力増強に努めたのである。

挺進隊は、各兵科から選抜された将兵を以つて編成され、所謂切込隊であり、特殊任務を持った部隊である。その任務について列記すれば、概略次の通りである。

- 一、敵の師団司令部、連隊本部等を襲撃し指揮系統を攪乱する。
  - 二、砲兵陣地の襲撃、及び対戦車肉薄攻撃。
  - 三、鉄橋、橋梁等を爆破し、交通網を破壊する。
  - 四、有線、無線等通信網の破壊。
- 以上の任務を遂行する為、日夜必死の猛訓練を実施、

特に部隊の特性上、夜間訓練に重点を置いたことは云うまでもない。関東東軍の状況は、最盛期に比べ戦力も極度に低下し、近代装備のソ連軍に対し、広大な国境線を守り抜くことは、至難な問題とされ、最悪の場合には戦線を縮小、大連、吉林、図們を結ぶ山岳地帯に布陣し、防衛する作戦であることも既に承知していたが、公表の限りではなかつた。しかしこのことは、ソ連が察知せぬ筈は無かつたであろう。このような状況の下で、戦力の劣勢を補完するため、遊撃戦法が採用されたことは当然の帰結であつた。

作戦上、劣勢なる軍隊が、優勢なる軍隊と対戦する場合、奇襲戦法を以つてするのが定石であり、この措置は成功し、各処で赫々の戦果を挙げたことは事実である。

#### ソ連侵攻

昭和二十年八月八日夜半、突然「キーン」と云う爆音が頭上をかすめた。普段聞き慣れない金属性の爆音は、正しくソ連機と直感した。同室に寝ていた沢、池田両見習士官に「オイ、ソ連機だ、起きろ」と起床を

促した。両見習士官はよく眠っていた様である。当日はいつもの如く演習を終り、明日の教育計画を検討し、器材の準備等下士官に指示して、就寝は十一時を過ぎていた。夏の夜のこと、うつらうつらとまどろんでいた。兎に角軍服を着け、重い気持ちで一服火を付けた。その時であった。「ドカーン」と云う爆発音、異常に気付いた篠原、日高両見習士官が、第二兵舎から駆けつけて来た。皆口数は少なく、夫々に憶測をめぐらし情報を待っていた。数分後伝令の言に依れば、先刻師団司令部に爆弾が投下されたこと、准士官、見習士官以上は大至急に集合とのことであった。

大隊長石崎大尉の命令に依れば

一、本九日零時、敵ソ連軍ハ国境ヲ突破、侵攻ヲ開始セリ。

一、侵攻正面ハ主トシテ、東寧、同江、黒河、満州里ノ四正面ニシテ、国境守備隊ハ目下交戦中ナリ。

一、事後ノ行動ニ付イテハ、別命ヲ待テ。というのであった。

その他若干の指示を受け、中隊に急いだ。予期して

いたものの、来るべきものが来たと云う実感であった。中隊長亀山俊宏少尉（後中尉）の命令に従い、兵器、弾薬、被服、糧秣、医薬品等、一両日は出戦準備に繁忙を極めた。

しかしその時点では、戦争といった深刻な心境ではなく、案外冷静に、業務を処理することが出来た。思えば初年兵当時、第十師団の動員を経験しており、このことが関係したかも知れない。

#### 最後の師団命令

出戦準備を終わり、次の命令を待っていた。戦争とはこんなものか、これでは演習より楽じゃないか等と、軽口をたたく者もあった。しかし内心は、嵐の前の静けさをひしひしと感じていた。

#### 八月十二日の師団命令

一、敵ハ松花江ヲ遡上シ、目下富錦地区ヲ攻撃中ナリ。

一、挺進隊ハ師団ノ後衛トナリ、松花江右岸ヲ西進シ、依蘭、方正ヲ経テ、吉林ニ向イ転進スベシ。

一、余ハ方正ニ先行スル。

というものであった。

これが、最後の師団命令になろうとは夢にも思わなかった。悪戦苦闘の末、武装解除まで再び聞くことは出来なかった。この命令は不本意極まりないものであった。当時の自分としては、初陣のことであり、師団が現地に統一展開し、一戦交えることを期待していた。しかし、現実には厳しく、一小隊長の感傷によって、解決されるような生やさしいことではなかった。

歩兵部隊を始め、諸隊は転進を開始した。中隊では、篠原見習士官の指揮する第四小隊が、中隊の虚弱兵を併せ引率、トラックで先発した。他中隊も同様であった。池田見習士官の指揮する第二小隊も後を追った。

残るのは第一、第三、第五小隊である。八月十三日突然、敵の偵察機が飛来し、超低空で偵察を始めた。時には兵舎に突っ込んで来るような状況であった。切歯扼腕、三個小隊一斉に集中射撃を行い、撃退したのであった。小銃による対空射撃は、効果がないといわれていたが、一個小隊おり、無我夢中であつた。その後、同機と思われる偵察機が再び来襲、容赦なく機銃掃射を浴びせて来た。機銃弾が地面を一直線に走る。危険

であり、全員退避する外なかった。対空砲火があればと悔まれてならなかった。

その頃、邦人や朝鮮人が、続々と避難する姿が、重苦しく見受けられた。

#### 転 進

諸隊の転進が終るのを待ち、八月十四日夕刻大隊は転進することになった。第一、第二中隊先発、沢見習士官の指揮する第一小隊は、大隊長直轄となり転出、第三小隊は後衛尖兵を命ぜられ、転進に当り、兵舎の焼却を命ぜられた。所謂焼土戦術であり、敵に一物も与えぬ心算である。

午前中、自ら爆破指揮官となり、第四分隊長得田兵長（下士官候補者）渡辺一等兵（小隊長当番）の二名をして、炊事場のボイラー二基を爆破せしめ、無事完了した。続いて、各分隊を部署し、本部を始め、各中隊兵舎、倉庫、哨舎に至るまで、完全に点火準備を整えさせた。

夕刻五時、ラッパの音を合図に、一斉に点火、屯営はまたたく間に火の海と化した。火は風を呼び、風は

火をあまり、まさに天をも焦す火焰に、気はいらだつばかりであった。

その間、警戒の任に当たっていた第五小隊長（日高見習士官）と、夫々小隊を掌握し、本隊を追及した。陽は赤く、將に暮れようとしていた。大隊長に報告、ひとまず大任を果たしたのであった。大隊副官森見習士官（一期先輩、後少尉）が、「大隊長が褒めていたよ」というので、「何ですか」と尋ねると、良く焼いたということであった。放火して褒められる等、予想もしていなかった。大隊長は速くから、双眼鏡で眺めておられたようである。後を振り向けば、佳木斯の飛行場は敵機に爆撃され、その惨状は目を覆うべく、また兵器廠、貨物廠などは、松花江を遡上した敵の江上艦隊に砲撃され、火の手が上がっており、街のあちこちにも、漸く暮れんとする薄暮の空を、赤く染めているのが散見され、殺伐たる情景であった。

それからいよいよ、本格的な転進が始まったのである。後衛尖兵（本隊の後方を守る部隊で、兵力一個小隊、通常將校が指揮する）である我が小隊は、師団の

後方を守り、対戦車攻撃に備え、それぞれ弾薬を背負つての転進である。敵との距離をとるため、三日二晩不眠不休の強行軍であった。その間早くも、落後者が続出し、収容しながらの転進は生やさしいことではなかった。むしろ、前衛の尖兵（部隊の進路を保持し、進路上の障害を排除しながら前進する部隊。兵力一個小隊、將校が指揮する）であればと、悔やまれて仕方がなかった。

赴任早々、第一種巡察に服務し、また挺進隊に転属後、火炎放射機に関する師団の研修会が計画され、その教官を命ぜられた。対象者は各兵科の中少尉、並びに見習士官ということであった。余りのことに躊躇したが、新編成師団戦力向上のため、断ることも出来ず、あえて引き受けたのである。

師団指令部に出頭、係官（中尉）と所要の打合せをし、準備を進めていた矢先、開戦となり、このことは実現しなかった。この度は師団の後衛尖兵と、色々責任を負わされる宿命にあつたようである。しかし、決して愚痴をいう訳ではない。むしろ、重任を与えられ

ることは名譽であり、かえって喜びを感じていた。というのが率直な心境であった。

#### 対戦車戦

八月十六日午後、敵戦車接近の報に接し、部隊は大隊長の命令一下、松花江右岸の丘陵地に展開、対戦車肉薄攻撃に備えた。この時大隊長以下、 unnecessary 装具は一切投げ捨て、下士官、兵は小銃と銃剣の極く軽装で火薬を抱き、決戦にのぞんだのである。

私的なことではあるが、この時、私は肌につけていた氏神の御守りと、千人針を投げ捨てた。勿体無いことではあるが、死を覚悟してのことであり、死後女々しいといわれたくない配慮からであった。しかし敵の戦車は、キャタピラの音を響かせながら、松花江右岸の道路を堂々と西進して行った。対戦車戦は不発に終わったのである。あつけに取られた我々は集結し、依蘭に向け転進を急いだ。その頃、依蘭方面では、空中国よりの爆撃と、江上艦隊（搭載砲は野砲級）の砲撃を受けていた。情報によれば、依蘭橋は破壊され、すでに退路は遮断され、先行中隊は死傷多数ということである。

あった。まともな道路や鉄道は行くべくもない。止むを得ず、支流の牡丹江を遡り、南下し、師団命令を頼りに、一路吉林に向かったのである。

前日、八月十五日の終戦は知る由もなく、また爾後三カ月の難行軍が続くことなど、夢想もしなかった。大隊長直轄の第一小隊長、沢見習士官（後少尉）は、将校斥候として任務遂行中、大腿部貫通銃創を受け、遂に手榴弾で自決したということである。彼は土佐出身で、闘士満々、頼もしい青年将校であった。生前常に「俺は高知の老舗、某味噌屋の俵で、坂本龍馬の血を受けている」と、豪語していたことを思い出す。冥福を祈るのみである。

その晩、転進開始後初めて、満人部落に宿営した。将兵ともに睡眠不足であった。深夜大隊長より将校斥候を命じられた。任務は橋梁偵察である。部下二名を引率、暗夜の道を目的地に向かった。地理も判らぬまま危険を犯し現地に着、見れば橋梁はすでに破壊されていた。川幅、水深、流速、両岸の状況等、渡河不可能と判断し、その旨大隊長に報告、部隊は方向転換、

別路転進することとなった。状況は悪化し、前途多難を思わせるものがあつた。

#### 牡丹江渡河

八月十七、八日ごろ、終戦のデマが飛び始めた。ソ連機は空中からピラを撒き、満人の動向もおかしくなつた。しかし信用する気は全くない。大隊長は自ら状況偵察に出られた。しかしその後再び会うことが出来なかつた。どうなつたのか、以後状況は全く判らず、大隊本部及び第三中隊の盲目行軍となつた。

八月も下旬、食糧もなくなり、現地で調達するしかない。季節的には畑の作物が実つており、胡瓜、茄子、南瓜等行きずりに調達出来たことは幸運であつた。しかし疲労は重なり、行く手には満人の抵抗もあり、行軍速度も落ちてきたことは否めない事実であつた。しかし至上命令に従い、ともかく吉林を目指し南進を続けた。障害は牡丹江であつた。何所かで渡河しなければならぬ。川幅百メートル、水深は深く急流であり、徒歩で渡渉できるような代物ではない。何所かで渡河点を発見するべく、絶えず念頭に置きながら行動を続

けていた。

ある日、峠から双眼鏡で偵察、川岸に一隻の渡し舟を発見した。ただし折悪しく舟は対岸に繋いである。

不吉な予感が脳裏をかすめた。この岸の部落で昼食、午後渡河を決行することになった。その部落に人影はなく無人の里であつた。決行に当り、本部、中隊から泳ぎに自信のある者を選抜し、対岸の小舟を引き戻すことになつた。無理な計画ではあるが、それ以外方法はなかつた。

部落を出発、本部、指揮班を中心に右第五小隊、左第三小隊、それぞれ二線に展開、万々に備えた。主計山田見習士官（一期先輩、後少尉）以下、下士官兵数名が禪一丁で飛び込み、急流に押されながら中流に達すると、突然、対岸の山上から猛射を浴びてきた。わが方も一斉に火蓋を切つた。いかにせん前は河、前進することも出来ず切歯扼腕するのみであつた。距離二百メートル、わが方は河岸の平地であり、状況は全面に不利であつた。

伏せている前後左右に、小銃弾がブスブスと土煙を



上げ危険であった。後方の擲弾筒分隊に攻撃を命じ、ようやく山上の敵を制圧することが出来たが、敵はなお執拗に抵抗し渡河を拒みつづけた。渡河を諦め避退するにも危険が伴い、日没まで交戦を続行し、別路転進したのである。この戦闘において負傷者二名、馬一頭が死亡したが、軽微な損害ですんだことは何よりであった。後続部隊があれば、より積極的に進路を開拓し、また援護射撃を期待することもできるが、後にも先にも大隊本部と第三中隊（指揮班および二個小隊）であり、努めて兵力の温存を図らねばならなかった。

さらに上流に遡り、数日後渡河に成功した。河は急流で条件は悪く、難渋を極めたが、敵の抵抗もなく無血であった。

#### 雨 季

雲行きも変わり、雨季を想わせる九月の初旬であった。いつものごとく、山腹を前進していた。夕刻、無名部落の山腹陣地から突然、軽機関銃の連射を受けた。距離三百メートル、兵力一個分隊、直ちに道路両側の川岸に展開、反撃開始、さらに一部をして、道路右側

の山上を占領せしめ、援護を命じた。川幅三十メートル、溪谷をなしており両岸は険しく、渡渉困難であった。兵力はわが方が圧倒的に優勢であり、容赦なく攻撃した。交戦一時間、ようやく日も落ちて敵も沈黙した。無事橋梁通過、方向転換して川岸に沿い夜行軍を続行した。その夜、大粒の雨がぼつぼつ降り出した。雨季の前兆であった。

満州の九月は雨季である。連日篠突く雨に悩まされることとなった。まともな道路も鉄道も通ることが出来ず、山を越す以外に方法はなかった。昨日も今日も、また明日も雨に打たれながらの行軍である。頭から靴の中まで雨に濡れ、火を炊くにもマッチはなく、あっても濡れていた。また燃えるような何物もない。連日の行軍に疲れ果て、木の根を枕に眠るしかない。降り続く雨は顔を濡らし、目から耳、鼻から口、首から背筋に流れ込み、到底寝ていられる状況ではなかった。夜半全員起床、当てもない行軍を続けるのであった。

東滿は湿地が多い。土地が古く侵食のため表土が流亡し、粘土が露出しているからである。対ソ戦に備え、

湿地通過の演習を再三繰り返したものの、膝まで没する湿地帯を通過する時は全く処置なし。泥沼の中に大きな岩らしきものを発見し、ようやくたどりついたところ、日本馬の死骸であった。先行した他の部隊の馬であろうか、馬体の一部が泥上に出ているだけのことであった。菌を食いしばって進んだ。

一人の兵が、「小隊長殿、自分はもう歩けません」と悲壮な声で訴えるのであった。「何を言うか、苦しむのは皆一緒だ。歩け」と励ましたものの、到底歩ける状態ではなかった。恐らくそこで果てたものと思われる。小柄ではあったが素直な兵隊であった。転進開始のとき、先発させておればと悔やまれて仕方がなかった。

その頃から落後者の収容が難しくなった。落後者に付けた兵隊と一緒に落後する事態が続出した。分隊長の進言もあり、中隊長に相談の上「苦しいのは皆一緒である。今後落後しても収容出来ないから、各自自力で菌を食いしばって従ってこい」と厳命した。つらかった。しかし状況止むをえないものがあつた。

その頃、開拓民が山中を避難しつつあつた。見れば老人、婦人と子供ばかりである。気の毒というほど単純な状況ではない。手を貸すことも出来ず、追い越す以外になかつた。もう少しで峠というところで異様な死体を見つけた。中年の婦人であつた。見れば舌を噛み切り息絶えて、苦悶の色をたたえていた。

死体は折りからの雨に叩かれ、正に地獄絵を見るようであつた。さらに進むと山中の道端に生れて間もない嬰兒が捨てられていた。乳房を求めてか火が着くように泣いていた。助かる見込みはない。それにしてもこの子の母親は何故一緒に死なないのか、怒りが込み上げてくるのであつた。ついに一発兵隊が発砲したのである。彼らはその後どうなったのか知る由もない。

避難民の多くは開拓民であつた。国策に従い、満洲に新天地を求めて移住し、食料増産に努めた人たちである。生死の境を彷徨する極限状態の中で、かわいいわが子を捨てて、あるいは満人に預けた親の心境もさることながら、残された孤児の労苦を偲び、心を痛めるのである。その後日中の国交も回復した今、祖国に

肉親を求めて帰国した姿を、新聞、テレビに見て、目頭の熱くなるのを覚えるのである。一人でも多くの孤児が、肉親に再会できることを、心から祈って止まない次第である。

### 単独行

雨季も明けた頃であった。連日の行軍に兵隊の体力も消耗してきた。落後者を收容する手段は講じていない。個人の体力と精神力任せである。ここで態勢を整えなければならぬ。そのころ道端には、腐乱死体が頻々と遺棄されていた。中隊長が落後者の收容を命令された。

「よし、俺が残る」と、ある満人部隊の入り口で主力を先行させ、自分一人で待っていた。真夜中である。そこに五、六騎の乗馬部隊が接近してきた。耳を澄ませると日本軍のようである。「誰何」したところ特務機関であった。

「落後者を見なかったか」と尋ねると、「後方一千五百メートルの地点に一人の兵隊が転げながら歩いていた。待っていても見込みがない。この付近は状況が

悪いから先に急げ」ということであった。先頭の指揮官は、数日前ある満人部落でお会いした特務機関の少佐殿のようであった。止むなく一人で、寝静まった満人部落を通り抜け、主力を追及した。村外れに差しかけたとき、突然一人の満人が話しかけてきた。言葉は全然判らない。彼を無視して予定通り前進すると、彼は二、三步後方を着いてくるので気持ちが悪かった。拳銃で打つかそれとも軍刀で打ち切るか、銃把を握った刀の柄に手をかけたりしていると、危険を感じたのか、咄嗟に唐黍畑に逃げ込んでしまった。ほっとしたものの道路の面側は一面の唐黍畑、夜風に葉擦れの音がさがさと鳴っており、不気味であった。行くうち三叉路に差し掛かった。さて右に行くべきか、左に行くべきか迷った。標示用の白テープがあるが、両方共ちぎれていて判りにくい。月明かりに路面をよく見ると、編上靴の跡があるが、進行方向がよく判らない。しばらく腕を組み思索していた。ちょうどその時、右前方約一千メートルの部落で犬の鳴き声が聞こえた。兆候による判断でその部落に急行した。歩哨が立

つており、その案内で無事本隊に到着することが出来た。そこには隊長以下、本部、指揮班の面々が、土間で焚火を囲みながら、事後の行動について作戦を練っていた。

聞けば、彼の満人は、中隊長より出された案内者であり、この家の主人であった。殺意を持ったことにたいし恥じ入ると共に、中隊長の計らいに感激した次第である。戦場における単独行動は危険であることは百も承知しながら無謀であった。しかしこのことは、事後部下を掌握する上に決して無駄ではなかったと思われるのである。

#### 難関・老爺嶺

少量の食糧しか準備できないまま、いよいよ難関・老爺嶺に突入、気は重かった。老爺嶺といえは満州の二大山脈の一つであり、西の興安嶺には及ばないが、東滿の峻険であった。未知の地域であり、踏破するの何日かかるのか全然見当が付かない。最悪の場合、山中で白骨化する恐れもあった。後は天まかせの冒險的な作戦であった。

日を経るに従い山は険しくなり、前途多難を思わせるものがあつた。歩くべき道は無く、銃剣で雜木や熊笹を伐採し、磁石で方向を維持しながらの前進であつた。岩場等障害物があれば、知らぬ間に方向を誤り、また修正するという状況で、前進は遅々として進まない。そのうち、食糧も盡き不安は募るばかりであつた。山中で雜木の新芽、きのこ等、あるいは溪流に芹を探して飢えを凌ぐ状態が続いた。人跡未踏の深山であり、昼なお暗く鳥の啼き声も聞けない。

直径一メートルもある樅や落葉松が立ち枯れ、倒れて折り重なっている。跨ぐ力もない。這いながら恰も蝸の行進となつた。夜は露営、一日の行程約一キロ、吉林への途は遠かつた。朝起きて見ると既に冷たくなっている兵も続出した。別に苦しんだ形跡もない。枯木が落ちるとはこのことであろうか。動けなくなつた兵隊は現地に残す以外に方法はなかつた。後髪を引かれる思いで部隊が発すると、背後で爆発音、重苦しい空気が流れる。直接ではないが、兵の中には「こんな山中で我々を白骨にするのか、将校の責任だ」と不

満の声が耳に入るようになった。軍医は引き返せといい、隊長は予定通り前進せよという。尖兵の私は苦境に立った。しかし今さら引き返す意志は無く、隊長の命令に従い前進を続行した。

この頃、友軍機が通信筒の一つでも落としてくれな  
いか、期待する方が無理であった。

八月十四日の夕、友軍機がただ一機、佳木斯の上空を一周し、西空に消えて行った。友軍の機影を見たのはこれが最後であった。翌日稜線に進出、さらに前進すると正に天祐神助か、木挽小屋を発見したのである。そこには唐黍の粉が米袋に一杯入っていた。久し振りに穀物の粥を口にし、隊長以下生氣を取り戻した。しかし今だ樂觀は許されない。

疲れた五体を引きづりながら前進、途中木材で川を堰止め、水と共に原木を流す堰堤があった。下流の深みに手榴弾を投げ込み、浮いた魚で栄養を補給した。これは自粛していた手段であったが、状況止むを得ないものがあった。漸く、小鳥の啼き声も聞こえるようになった。人里も近いのであろうか。

思うに、南進そのものが、結果的に、難関・老爺嶺山脈を縦断することになり、余分な日数を費やしたことは誠に不幸なことであった。しかしあの時点で、あれ以上のことは出来なかったような気がしてならない。多くの犠牲者を出したけれども、初志を貫徹、峻険の踏破に成功したことは、せめてもの慰めである。

#### 歩哨線突破

数日後、漸く横道河子に見える地点まで進出することが出来た。山脈の盆地にある黄道河子は、かつて軍の兵站基地があった処である。そこには既にソ連軍が進駐していた。かといって、そこを避けて通ることも難しかった。食糧は無く長期の山越えに疲れ切っていた。夕刻までに山麓まで降り、夜十二時を期し、歩哨線を突破することになった。ところが大事な時に異変が発生した。本部、指揮班との連絡を失ったのである。下山中、連絡兵が泉の水を飲んでいる間のことであった。なんたる不覚、もう再び会えないのではないか、重荷がずっしりと肩に掛かって来るのを感じた。

兵隊の心はややもすれば沈滞気味であった。しかし

ここで気を緩めてはならない。挺進隊編成以来、ひたすら夜間訓練で鍛えたのは何のためか、今こそ挺進隊の本領を発揮すべき時だ。自分にもそういう聞かせ、兵隊にも気合を入れることを忘れなかった。遅疑逡巡は指揮官の最も戒むるところ、躊躇してはいられない。日高見習士官と協議し、「断じて行けば、鬼神もこれを避く」ことを信じ決行に踏み切った。生か死か、あるいは捕虜か、一小隊長の決断により、二個小隊の運命を左右するのである。この時ほど責任の重さを感じたことは無い。

十二時行動開始、草原を隠密行動であった。突然「誰何」され、いきなり自動小銃で射たれた。複哨の内一名が報告に帰った。距離十メートル少し進み過ぎたようである。拳銃で射殺するか、それとも軍刀で打ち切るか迷った。しかし、歩哨線で紛争を起こすことは得策ではない。事後の行動を考慮し、息を殺しながら、迂回し、漸く正面の山麓に辿り着くことが出来た。

安堵したのも束の間、この山は険しく、樹木もまばらの岩山であった。簡単には進めない。部下も疲れ切

っており、終始先頭に立った自分も疲れていた。夜が明け始めた。もう少し前進したいと気はあせるが、足が前に出ない。止むなく小休止、岩陰から後方、特に鉄道の巡察に気を配っていた。まだ安心出来ない。休む間もなく発進、といってもなかなか腰が上がらない。九時頃漸く頂上に辿り着くことが出来た。ここで大休止、直線距離にして約一キロ、緊張の連続であり急に疲れが出て来た。九時半頃、右方向から本部、指揮班、暫くして左方向から五小隊が到着、再会を喜び合った。但し、これは全くの偶然であった。

十月下旬であったと思う。分隊長以下を失ってから山岳地帯を南下中、北上する中共軍の一縦隊（兵力一個中隊）と遭遇した。山腹道の曲がり角であり、全くの偶然であった。双方共に緊張し、隊伍を整えて擦れ違った。彼等は日本の敗戦を、既に知っていた筈であり、警戒を怠っていたであろうし、また我が方も無用の戦闘を避け、極力兵力の温存に努めているところであつた。もし相手がソ連軍であれば、どうなつたであろうか、双方ともただでは済まなかつたであろう。誠

に奇妙な出来事であった。

### 寒中露営、武装解除

十一月も中旬ともなれば、満州は完全に冬である。野も山も凍てつき、小川は結氷して渡れるようになる。しかし安眠出来る場所はない。稜線に歩哨を立て、谷間で火を炊きながら車座になって眠った。火を炊けば危険なことは分かっているが、そうする以外に方法がなかった。

夜中、一人の兵隊が目覚めない程疲れきって、被服に火が着いたのも知らず大火傷をおってしまった。その後どうなったか記憶にない。また敵襲を受け二名の犠牲者を出したが、医療器具もなく、軍医もそれ以上の処置が出来なかった。焦ってみても、どうにもならない現実であり、そのまま眠ることも出来ず、木の葉を枕に寒空を仰げば、何事も無かったように北斗星が煌めいていた。

状況偵察のため山麓の部隊に入る。兎に角そこで確かな情報を得ることが出来た。八月十五日の終戦は間違いない。これ以上無理するのは無意味であった。

一兩日部落に宿営、慎重協議の上、中隊長は武装を解くことを決断された。

忘れもしない。昭和二十年十一月十七日であった。所は吉林省蛟河、部落の広場に整列、皇居に向かい最後の「捧げ銃」を行った。涙が止めどなく流れた。ソ連に武装解除されたのではない。あくまでも自主解除であった。

佳木斯を出てから三ヵ月、直線距離にして四百五十キロ、実際は恐らく、八百キロの行程では無かったろうか。敵はソ連軍だけでなく、満人にも抵抗され、四面楚歌の中、飢えと自然との戦に心身を擦り減らした。このような状態の中で、ここまで来たのは一体何であったのか、いうまでもなく崇高なる軍人精神と、二千年培われてきた日本人の心であった。